

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520380

研究課題名(和文) 大戦間期チェコにおける社会主義リアリズムをめぐる議論

研究課題名(英文) Controversy over Socialist Realism in Interwar Czechoslovakia

研究代表者

太平 陽一(OHIRA, Yoichi)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：20169056

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：権力の横暴により、議論の余地なく社会主義リアリズムが強制されたソ連とちがって、戦間期チェコにおいては、社会主義リアリズムをめくって活発な議論が戦わされた。この論争は、前衛芸術の理論家自身がアヴァンギャルド芸術と社会主義リアリズム理論の連続性を示唆したという点でも、社会主義リアリズムをキツチュと見なす今日の定説を先取りしていたという点でも、この論争は社会主義リアリズムを再考する上で、きわめて大きな理論的、歴史的意味を持つことが判明した。

研究成果の概要(英文)：In Soviet Union socialist realism was forced down as the sole aesthetic principle, whereas in interwar Czechoslovakia it evoked aroused debates between avant-gardists and adherents of socialist realism theory. These debates proved to have theoretical and historical significance because avant-gardists proposed a hypothesis about continuity of the avant-garde and socialist realism for themselves and anticipated the now widely accepted definition of socialist realism as kitsch.

研究分野：スラヴ文化論

キーワード：社会主義リアリズム アヴァンギャルド芸術 構造主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の社会主義リアリズムについての研究は、もっぱらソ連の社会主義リアリズムに関するものだけであり、ソ連同様、形式主義を批判し、社会主義リアリズムを支持する左翼知識人とアヴァンギャルド芸術を推進する左翼知識人との対立が存在したチェコスロヴァキアの状態についてはあまり知られていなかった。

(2) ロシア革命の1917年と共産党がチェコスロヴァキア共和国の政権を掌握する1948年までの間(ただし39年から45年にかけてナチスドイツの保護領であった第二次大戦中を除いて)民主主義体制にあったチェコにおいては、唯一の創作原理として社会主義リアリズムが有無を言わず強制されたソ連とはちがって、まだしも自由な議論が可能であったが、共産党系知識人とアヴァンギャルディストの間で交わされた、シュルレアリスムや社会主義リアリズムをめぐる活発な論争の内容はもちろんのこと、そうした論争があったことすら、チェコ国外では全くといって良いほど知られていなかった。

(3) 構造主義言語学を生んだプラハ言語学サークルの名は我が国においても早くから知られていたが、同サークルの中心メンバーであったヤーコブソンやムカジョフスキーが、上述の論争において大きな役割を果たしたという事実については全く知られていなかった。さらには、彼ら構造主義を代表する研究者が、社会主義リアリズム陣営からの攻撃に対してアヴァンギャルド芸術を擁護したためなのであろう、アヴァンギャルド芸術同様、構造主義も共産党系知識人の批判的になっていったこと、況んやその批判の具体的な内容、その批判に対して構造主義者がどう対応したかについても、我が国では全く知られていなかった。

2. 研究の目的

(1) ソ連以外の社会主義リアリズムのあり方を探ること、とりわけ、チェコ独自の文化的コンテクストがもたらしたアヴァンギャルディストたちと社会主義リアリズムを信奉した共産党系知識人との論争を通じて、ソ連における教条的理解とは異なる社会主義リアリズム理解をひとつの可能性としての社会主義リアリズム理解を明らかにすることが、当初の目的であった。

(2) その後、上記の論争を通じ、社会主義リアリズムの理論との比較対照によって浮かび上がってくる西欧とは異なるアヴァンギャルドのあり方、チェコ独特のアヴァンギャルド理論を見届けることが、その目的に加わった。

(3) かなり遅い時期まで、チェコのアヴァン

ギャルディストたちは、社会主義リアリズムの理念そのものを否定することはなく、シュルレアリスムを社会主義リアリズム理論の中に位置づけることを試みた。共産党系知識人との論争の過程でなされたこの試みを検討することで、ボリス・グロイスとはちがった意味でのアヴァンギャルドと社会主義リアリズムの関係、互いに相容れない全否定し合うのではない関係をより具体的に探る必要が生じてきた。

(4) 最後に、共産党系知識人からはアヴァンギャルド芸術と連携したとして展開された反構造主義キャンペーンのプロセスを、30年代のアヴァンギャルド批判と比較するという課題が浮上した。

3. 研究の方法

(1) 戦間期チェコにおける政治・文化情勢というコンテクストの中でとりわけチェコ・アヴァンギャルディストによるソヴィエト文化の受容とチェコスロヴァキア国内に生まれた亡命ロシア文化との関係に注目しつつソ連当局によるアヴァンギャルド芸術に対する形式主義批判を支持し、唯一の創作原理として社会主義リアリズムを支持した共産党系知識人とアヴァンギャルディストそれぞれの主張を、当時の新聞、雑誌に発表された論文に辿るという平凡だが、地道な方法を選んだ。

(2) その際、アヴァンギャルド芸術を理論面で擁護したのがヤーコブソンやムカジョフスキーら構造主義者であったことを踏まえ、共産党系知識人からの構造主義批判や、プラハ構造言語学の知的背景をなす亡命ロシア人たちのユーラシア主義者たちの主張にも忘れず注意を払うことを心掛けた。

4. 研究成果

(1) 社会主義リアリズムが公式に打ち出された1934年の第一回全ソ作家会議以前の20年代のチェコにまで遡って、社会リアリズムの先駆形態と見なせる反アヴァンギャルド的プロレタリア芸術の唱道者とアヴァンギャルディストたちとの論争を辿ることができた。

(2) 「プロレタリア主義者＝リアリスト」によるアヴァンギャルド芸術批判は、概してソ連の文化官僚による形式主義批判を反復しているだけだが、1930年代のチェコ・アヴァンギャルドの中心になっていたのは、ソ連には存在しなかったシュルレアリスムであったがために、非理性主義への批判など、チェコ独自の論点も少ないながら見いだせた。

(3) その反面、ロシア・アヴァンギャルドにおいて中心的な役割を果たした構成主義についての批判が戦間期チェコにはほとんど

目につかないことに気づいたので、建築理論家でもあったカレル・タイゲの構成主義観の変化とりわけ古典主義への転回点、社会主義リアリズムの前兆となったソヴィエト宮殿コンペティション以降のタイゲの構成主義観の変化を、建築とブックデザインの分野において辿った。それは、単一機能主義から多機能主義へ、あるいは芸術清算論から美的機能や心理的機能の容認への転回と見なせることが判明した。

(4) タイゲらアヴァンギャルドの理論家たちは、シュルレアリスムが社会主義リアリズムの大きな枠組みの中におさまりうると考えて、謂わば「潜在的可能性」のまま終わった社会主義リアリズムを構想していた事実は、アヴァンギャルドの夢の実現としての社会主義リアリズムというボリス・グロイスの見解そのままではないにしても、両者の関係を再考する上で興味深い例を、グロイスの議論よりはるかに具体的に提供してくれた。その一方で、ソ連における社会主義リアリズムの具体的実践が理論としての（あるいは可能性としての）社会主義リアリズム理論と乖離したキツチュでしかない、とタイゲやブリアンらアヴァンギャルド陣営は批判した。この見解が、ミラン・クンデラやスヴェトラナ・ボイムの所説を先取りしていること、さらには、キツチュとアヴァンギャルドの関係についてのタイゲの見解は、クレメント・グリーンバーグの古典的論文を先取りしていたことは明らかである。

(5) 言語学、美学の分野において構造主義が生まれ、国際的に高い評価を得ていた戦間期チェコにおいて、プラハ言語学サークルの中心メンバーであったヤーコブソンとムカジヨフスキーが、アヴァンギャルド芸術を擁護したためか、共産党系知識人から構成主義者はアヴァンギャルディストと同類と見なされ、国際的な評価と反比例するように社会主義政権成立後のチェコスロヴァキアにおいては、アヴァンギャルド芸術と並んでマルクス主義言語学、美学の名の下に激しい批判の対象となった。戦後の構造主義批判は、構造主義の持つ権威の大きさと比例するように、チェコに於いてはソ連以上に激烈をきわめたことが、ムカジヨフスキーの自己批判の論文や社会主義体制下であえて構造主義の復権を暗々裏に図ったフヴァチークの著書などから、明らかになった。戦後の構造主義批判は、あたかも戦前の社会主義リアリズム批判を反復しているかのようであり、反論の余地なかったものの、社会主義リアリズムをめぐる議論が、戦前で終息したわけではなかったのである。

(6) 共産党系知識人による構造主義批判のもう一つの背景をなしていたのが、意外なことに、亡命ロシア人の間に生まれた思想、ユ

ーラシア主義と構造主義との結びつきであった。ロシアの文献学者はチェコからの帰国後粛清され、民族誌学者ボガトウィリヨフも左遷されたが、これはチェコ滞在中にユーラシア主義者であり構造主義者でもあったトゥルベツコイやヤーコブソンと親しく交流したことが原因であった。

(7) 反論の余地のない 1948 年以降のアヴァンギャルド批判、構造主義批判に至るまでのプロセスは、1960 年代のアヴァンギャルド芸術、構造主義復権のプロセスと鏡像的対称性を示すことが判明した。「内容において社会主義的、形式において民族的」というスターリンの命題が許容するためなのであろう 1920 年代のポエティスムが、チェコ独自のアヴァンギャルド芸術の流派として共産党系の文学理論家の批判を免れていたのに対して、フランスに起源を持つ 1930 年代のシュルレアリスムは免罪されることがなかった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

大平 陽一、戦間期チェコにおける社会主義リアリズムをめぐる論争：アヴァンギャルド、構造主義、社会主義リアリズム、『アゴラ』特別号、査読なし、(印刷中)

大平 陽一、ヤーコブソンの交友関係から見たプラハ学派の文化的コンテクスト：そのいくつかの側面、『スラヴ学研究』第 18 号(日本スラヴ学研究会)、査読有、51-85. 2015 年 3 月 31 日

大平 陽一、カレル・タイゲのブックデザイン：ポエティスム、構成主義、シュルレアリスム、そして機能主義 阿部賢一(編)『チェコ・シュルレアリスムの 80 年』(立教比較文明会)、査読なし、33-57. 2015 年 2 月 27 日

大平 陽一、プラハ言語学サークルにおける共生：構造主義とユーラシア主義、『天理大学学报』第 66 巻・第 1 号、査読有、79-91. 2014 年 10 月 26 日

大平 陽一,カレル・タイゲにおける構成主義的なるもの：ピュリスムから構成主義へ、構成主義から機能主義へ、『アゴラ』特別号,天理大学地域文化研究センター紀要,査読なし, 1-51. 2013年10月11日

大平 陽一,カレル・タイゲの構成主義理論に温存された美,『アゴラ』第10号,天理大学地域文化研究センター紀要,査読なし, 37-47. 2013年3月26日

6. 研究組織

(1)研究代表者

大平 陽一 (OHIRA Yoichi)

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：20169056